

社会的結びつきの語られ方を理解する

——東アジアの文脈に基づいて——

赤堀三郎（東京女子大学）

[日本語要旨]

本報告では、近年の社会的結合（social bonds）の表現のされ方を扱う。社会的結合の表現には、どのような特徴が見出されるか。そこからいかなる含意が引き出せるか。これらの問いに答える過程で、東アジア発の社会学理論の構築可能性が探られるとともに、グローバル時代にふさわしい連帯を構想するヒントも示されるだろう。

まず取り上げるのは、社会的結合の表現のし方に関して、日本における東日本大震災以降の「絆」という言葉の流行である。絆は従来「social bond」を意味する言葉であるが、震災後の日本においては第一次集団ないし伝統的社会的紐帯とは異なる意味で用いられるケースが目につく。すなわちそれは、「見知らぬ者同士の連帯」という理想状態である。

なぜ、伝統的社会的紐帯と、見知らぬ者同士の連帯という異なるものが混同されるような事態が生じているのだろうか。本報告で着目するのは、近年のソーシャルメディアの台頭によって可能になった見知らぬ者同士の結びつきである。欧米では、ソーシャルメディアを介した結びつきは「オフラインの」関係の延長だと考えられている。だが日本や韓国ではどうか。匿名掲示板や動画サイト、オンラインゲームなども含めてソーシャルメディアの範囲を広く考えれば、東アジア的特徴が見えてくる。「ネット心中」問題や、出会い系サイト、オフライン・ミーティング文化、オンラインゲームにおけるつながりは、日本や韓国において見出され始めたものである。逸脱と捉えられるにせよ、そうでないにせよ、蓋然性が低いはずの見知らぬ者同士の結びつきが、ソーシャルメディアを介して蓋然性が高まっているという点は、すでに日常知と化していて、少なくとも想像可能にはなっていると見てよい。このことが、絆という言葉の奇妙な用法が広く受け入れられているという事態の背景にある。

従来、ソーシャルメディアを介した見知らぬ者同士の結びつきは、匿名性、あるいは pseudonym の使用などから、非人格的なものと考えられてきていた。だが、特に東アジアでの事例を精査すれば、そこではいわゆる「オンライン」での人格が用いられているという意味で、少なくともこの結びつきの表現の水準においては、「人格的な」関係が成り立っていると解釈できる。同質性／異質性という区別を導入すれば、ここに見出されるのは「見知らぬ・同質な者同士の人格的結びつき」となるだろう。だがその先に、「見知らぬ・異質な者同士の人格的結びつき」という、グローバル化時代の連帯という理想の実現可能性も展望できるのである。

